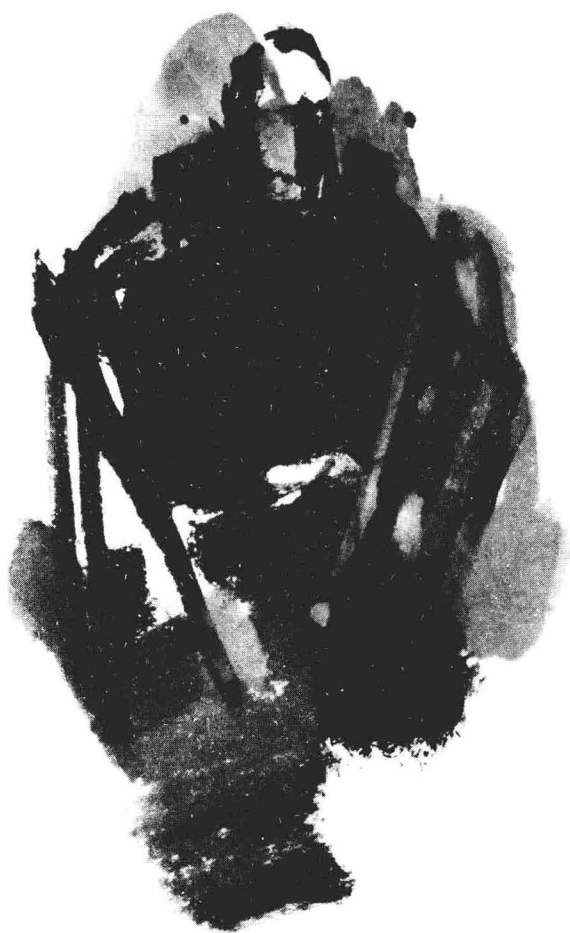


悪名を斬る

寺内大吉



悪名を斬る

定価 三百三十円

昭和三十七年五月五日 印刷
昭和三十七年五月十日 発行 ©

著作者 寺 内 大 吉

発行者 矢 貴 東 司

印刷者 北 山 茂

落丁、乱丁の節は
お取りかえ致します

発行所 株式会社 桃 源 社

東京都中央区日本橋蛸殻町一ノ二二
電話(六七二)四〇〇一、二番
振替東京 六四三五一番

目次

京洛篇……………五

街道篇……………五

江戸篇……………一〇

装
幀
御
正
伸

悪名を斬る

京 洛 篇

一

ひとしきり騒がしかったひぐらしが鳴きやんだ。
京の町に、はいよるようにして、たそがれがやってくる。

ここは東山の麓、名刹知恩院の山内だ。偉容をほこる大伽藍の屋根に、乳色の霧が音もなくながれていた。

書院の裏庭のほうで、さっきから物々しい掛け声が聞こえる。

「それっ、来い」

「やーっ」

「まだまだ」

「おーっ」

「そんなへっぴり腰で、剣先が届くか。それっ、おめーん、一本」

撃剣の稽古だ。

師匠格らしい大男に向かって七、八人の若者たちが、次にかかってゆく。

町道場なぞで見かける光景だが、少し違った点は、若者たちの頭がみんなくりくり坊主、身に墨染めの法衣をまわっている。

いや、師匠格の大男もまた同じ坊主姿であった。仏に仕える身が、夢中になって殺人の稽古をしているわけだ。

「今日はこれまで」

と、大坊主は木刀をおさめた。みんなは体の汗をぬぐいはじめた。

「さて、ぼつぼつ大殿へゆかねばならぬぞ。勤行がはじまる」

のっしのっしと大坊主は、書院のほうへ引きあげていった。

「五雲さまは強いもう」

「うむ、いくらかかっていっても、お法衣ころもの裾にさえ木刀が触れんわい」

「五雲さまは、当山へくる前に剣の修行でもなさっていたのではなからうか」

若い坊主たちは口々に大坊主——五雲坊の腕前をほめたえる。

「そんな話は聞かんぞ。八歳のとき、ここへはいったきり、一步も俗世間へは出たことのないお人だ」

「どこで、いつおぼえたのだらう」

将来は知恩院の門主になるであろうと衆目が見ている五雲坊の剣法の冴えは、一山の不思議の一つであった。

いつであったか、京八流の末を継承している吉岡一門が、先代の追善法要を知恩院でいとなんだことがあった。

法要のあと境内で若き当主吉岡清十郎が門弟を相手に稽古をつけた。

とつぜん見物のなかから傍若無人な笑い声がたった。五雲坊だったのである。

「なぜ笑うのだ、坊主！」

門弟はいきりたって詰めよった。

「そんななまくらな腕前では先代さまが泣くぞ」

五雲坊はおそれる気色もなく言いきった。若い清十郎はつかつかと歩みよった。顔面蒼白であった。

「ちっとは剣の心得のある坊主らしい」

「そんなものは知らんよ」

「広言を叩く以上は、知らんとは言わせぬ。さ、立ち会え」

「いやだ」

「なんと……」

「清十郎よ、よく聞け。今日は先代さまのお命日。おぬしが知恩院で坊主と剣を争い、勝ったにしても負けたにしても、地下のほとけ様はいい顔をせんぞ」

理屈はたしかにそのとおりであった。

「坊主、清十郎は貴様の顔を見忘れんぞ」

「そんなことはそっちの勝手だ」

「いいか叩きのめしてくれ」

とにかくこの日はもの別れになった。

以来めぐりあう機会がなく、二人の対決は果たされていないが、五雲坊の声名はとみにあがった。知恩院にたいへんな坊主がいる——。

二

五雲坊の趣味は剣法のほかに、もう一つある。

酒だ。無類の大酒飲みであった。

色黒い肌をしているので、酒焼けはそれほど目立たな

ったが、皮膚は底のほうからテリ輝いていた。

「五雲よ」

夕暮れの勤行がおわって大殿からさがろうとするととき、執事の法善坊が声をかけてきた。

「何だ」

「今宵、ちょっと顔を貸してくれ」

「酒を飲ませるといふのか」

「むろん飲ませる」

「どこへゆく、祇園か」

「あそこは危険だ。近ごろ、取り締まりがやかましい」

「坊主のくせに、目にあまる女遊びをするからよ」

「北白川に一軒、うまい家を見つけたぞ。その婆あが、話のわかる女でな……」

と、法善坊は好色な光りを両眼にきらつかせ、声をおとして語りだした。今夜、たいへん面白い趣向が組まれていると、いうのである。

「わしは女はごめんだ」

まだ二十八歳、男盛りのはずなのに五雲坊は女色の話にはぜんぜん乗り気でない。

「だから、いつものとおり、おぬしは酒だけ飲んでおれば

よいではないか」

「ほかにだれが同行するのだ」

「出納司しゅなうしの源心と式典司の良順とだ」

「悪い坊主どもがそろったな」

彼らはいずれも四十前後の僧で、知恩院の実権を掌中にしている坊主ボスたちである。

「では、つき合ってくれるな」

法善は念を押した。

「やめよう」

「なぜだ」

「酒なら、書院でだって飲めるわい。第一、おぬしらの目的は女だろう。それがなぜこのわしを誘うのだ」

「門主もんしゅ猓下ねがの手前がある」

「猓下——」

「門主さまは、五雲、おぬしをすこぶる信頼しておられる」

「……………」

「おぬしと一緒だと言えば山を出やすいのだ」

お世辞やおだてではなかった。

今夜これから同行する四人の僧は、いわば知恩院の大幹

部たちだったが、門主の信頼は五雲に対して一番深かった。

性、いろいろ、思いのままに振舞っている五雲だが、その人柄の奥に黄金の質を見つけたに違いない。

心からゆるしていた。五雲がどんなことをしても、嫌な顔をされなかった。

法善坊たちは、たっぷりこの門主の信頼感を利用しているふしがある。遊びに出るときは、必ず五雲を誘うのであった。

北白川の、流れに添った古びた邸宅。

公卿の別邸で、現在は持ち主はほとんど寄りつかず、留守番の老夫婦がひっそりと住んでいるという。ところが、婆あのが昔、祇園にいた女で、ここの広い建物と庭とを活用しようと、画策していたのである。

闇にまぎれて四人の僧たちは、黒門をくぐっていった。

「まあ、いらっしやいませ」

婆あが玄關先へ出迎えた。

「昨日の話、うまくまとまったか」

法善坊はたずねた。

「大丈夫ですよ。どうぞお上がりなすって」

根本のゆるんだ長い廊下を奥へすすみながら、法善坊はみんなにささやきかけた。

「おい今夜の趣向はな、茶屋遊びなぞとはちと違うのだ」

「ほう」

五雲を除く二人の僧たちは、ごっくりと生睡をのみこんだ。

「商売女の美しさはないが、まだ手つかずの初穂の面白さがある」

「法善、しかし大丈夫なのか」

「何が？」

「そんな娘たちを……」

「そこをおぬしらの腕によりをかけてな、やさしく口説きおとしてやるのよ」

うれしそうに笑う法善坊であった。

三

嘘ではなかった。やがて始まった酒宴、四人の僧のかたわらに一人ずつついた乙女たちは、どれも二十歳前の初々しい女であった。

服装もけばだったものをつけていない。お酌する手もと

も、馴れぬことなので心もとなかった。むろん、冗談口の一つもきけないで、身体をかたくしてすわっている。頃合いを見はからって、婆あが現われた。

「皆さん、お酒はこのくらいにして、お部屋のほうへどうぞ」

法善坊たちは立ち上がった。

「おい、わしはここに残るぞ」

五雲坊は言った。

「野暮なことをいうな」

「野暮ではない。わしは酒を飲んでいるだけで極楽なのだ」で、こでも動きそうになかった。

みんなが去ってしまうと、五雲坊はかたわらにいる女に、

「おい、お前らはどんな気で、こんな場所へきたのだ」

と、たずねてみた。

「はい。ここのお婆さんが楽しく遊ばせてやる、と言いましたの。お坊さまたちのお酒の相手をすればお金もあがるって」

「お前の家は何をしているんだ」

「南田町で傘張りを」

「年は？」

「十七です。きぬと申します」

「まだ十七か」

「ねえ、お坊さま。わたしを可愛がって」

あまり垢ぬけないしぐさで、きぬは五雲坊の膝にもたれかかっていた。

「こりゃ、離れろ」

「……………」

「もそつと向こうへ離れろ」

「ひどいことをおっしゃるお方。ね、お酒なんかやめて、わたしを抱いて」

きぬの目のなかに好色の炎が、めらめらと燃えたつてきた。

貧乏な傘張りの娘だ。金に目がくらんだのでもあろうが、それ以上に彼女の体には天性の好色さがあつたのかも知れない。

「離れろ。酒だけをついでおればいいんだ」

とうとう五雲坊はきぬを突き飛ばしてしまった。

女の誇りを傷つけられた、きぬは、あどけない頬っぺたをふくらませると、部屋のすみにしりぞいて五雲坊をにらみつけた。

「そんな仏頂面をするな。わしはな、女が嫌いなんだ」
手酌で、ぐいぐい酒をあおり続けた。

ふと、気づくといつのまにかきぬは立ちあがっていた。
そればかりか、するすると帯をほどきはじめていたのである。

「これ娘、何をする」

「わたし、このままでは帰れません」
パツと着衣を脱ぎ捨ててしまった。

貧乏の娘ながら今宵のために用意したのであろう。紅葉色の長襦袢を着ていた。

そのうすものがえがくきぬの腰の線は、十七歳とは思えないほどにみのっていた。胸のふくらみも、かなりあらわになっている。

「馬鹿な真似はよせ」

五雲坊は、そんな媚態をていするきぬのほうをちらりとも見なかった。悠然と酒盃をかたむけている。

「だいて、お坊さま」

「何だ」

「わたし、このままではお金、お金がもらえないんです」

「金なんぞは、あったことにしてもらったらよからう」

「今夜みえたお坊さまのなかでは、あなたがいちばん若い。そのお若いあなたが、どうして……」

きぬは歩みよると、五雲坊の鼻っ先へうすものでおおわれた下半身を突きつけてきたのである。

こんなにしても、男の欲望は動いてこないのか。

きぬは哀しい目つきをした。

「いくら若くても坊主は坊主じやよ」

「……………」

「戒律はおかさぬよ」
かいりつ

「お酒だって、その戒律……」

きぬは反論した。

むつりしていた五雲坊の顔に微笑がかすめた。

「そうだ。これも破戒だ」

「一つ戒を破ったんだから二つ目の戒を破ってもかまわないでしょう」

「馬鹿。一つ破ったら二つ目を破らぬようにするのが、人間の道だ」

きぬがいくら煽情してみても、五雲坊はことりと動かなかった。女をまったく無視して酒だけを飲みつづけた。

法善坊は、たしかに人選をあやまったようだ。

この十七だが、天性の淫女であるきぬを、式典司の良順坊のほうへまわしていたら、あんな事件はおこらなかったであろう。

四

良順坊の相手になったのは、おかねという可愛らしい十八になる乙女だった。

きぬより一つ年上だったが、彼女のほうは文字どおり初穂であった。きぬにさそわれて、楽しく遊んでお金がもらえる、それをまっこうから信じこんでいた。

だから良順につれられて別室へきたが、無邪気にハシャいでいた。

「お坊さん、何をして遊びましょうか」

「何をつて、あの遊びにきまっておるよ」

良順のほうも、あまり上手な口説き手ではない。

「拳でも打ちませんか？」

「拳だと」

「唐八拳よ。あたし、強いのだ」

「唐八拳などを打ってるひまはないわい」

いきなり良順は武者ぶりついてきた。

「あれえ」

「そんな声をたてるな」

畳の上へおし倒していった。

しかし良順は、そこでおかねの激しい抵抗にあったのである。

愛撫するために乳房へしのばせた良順の手首に、おかねの若い歯が立った。

「いたたたっ」

良順は乙女の体から飛びはなれた。

やっと咬むことはやめたが、

「いやだあ、いやだあ」

と、泣きわめきながら部屋を出て行ってしまった。

おさまりのつかない良順は、あとを追って婆さんのところへいった。

逃げこんだおかねは、婆さんの背後にふるえてすわりこんだ。

「おい、約束がちがうぞ。人の手を咬む犬みたいな女をよんでくれとは言わなかったぞ」

婆さんは、おかねをにらみつけた。

「何だね、お前さん。こっちだって困るじゃないか。納得

したと思ったから、あんたに来てもらったんだよ。それがいいよというときに、お客さんに粗相申し上げるなんて」

いつかの昔、茶屋のやり手に言われたせりふを今、婆さんは思うかべながら再現している。

「あたし、何にも知らなかった。こんな真似をするなんて。ただの遊びをするんだとばかり……」

「女が十八にもなって、ただの遊びなんてありますかい。さ、おとなしく旦那さんのあとをついてゆくんだよ」

「いや、いや」

「いうことを聞かないとね。痛い目にあうんだよ」

「いや。帰して、家へ帰して」

「ようし」

婆さんは良順に目で合図をすると、おかねをおさえつけた。

おそろしい力であった。いや力だけではなくさすがに女だけあって、抵抗をやめさせる急所のようなものを心得ていた。

背後からおかねのわきの下へ両手をさし入れて、しばらくあげた。おかねは体が宙にういてきて、両足をばたつかせ

る。

「ほら旦那、早く」

婆さんは良順坊をせきたてた。

初穂はこうした暴力によって、むざんにもむしり散らされたのである。

きぬに一指をも染めなかった五雲坊をかこんで、坊主たちは夜更けの道を東山のほうへもどっていった。

道々良順坊は、さっきの苦勞語をした。

好色な坊主たちは腹をかかえて笑った。

「馬鹿な奴らだ——」

五雲坊は、ひとり苦が虫を噛んだ顔でつぶやいていた。

だが、馬鹿な奴だ、とつぶやいているだけではすまされない事態が三日後にやってきたのである。

五雲坊は門主猊下の部屋に呼ばれた。

今年七十六歳、不犯ふはんの老僧は若やいだ顔つきであった。

不退転の信仰がどんな事態がおこっても老僧をとり乱させなかった。

いつもと変わらないにこやかな表情で、五雲坊にたずねてきた。

「五雲よ。お前はこの間の晩、北白川へ出かけたそうだ

な」

「よくご存じで——」

「うむ。聞いたよ、ある筋からな」

「法善か、源心か……」

信頼されている五雲坊は、この老僧にいつも甘えきっている態度をとった。

「それが違うな」

「だれですか」

「所司代の役人じゃ」

「所司代——」

「ひとりの娘が訴え出たそうじゃよ。知恩院の僧侶に、みさおを汚された、とな」

「えっ」

「五雲よ、まさかおぬしではあるまいのう」

あいかわらず、にこにこ笑っている。

「わたしは酒だけを飲んでおりました」

夜更けの帰り道を思い出す。良順坊のあの顛末がここへきたに違いない。

暴力でおかされたおかねが、所司代へ訴え出たのであるう。

「たぶん源心か良順じゃろうが」

門主猊下はちゃんと心得ておられる。

「……………」

答えなかった。朋輩を売ることはできない。

「そこで五雲、お前に頼みがある」

「はい」

「お前、すまぬがその悪徳坊主の身代わりになってくれ」

「とおっしゃいますと」

「たった今、この寺を出ていってもらいたいのじゃ」

五雲坊には門主猊下の考えているところが瞬間、わからなかったのである。

猊下はしずかに言い足した。

「源心や良順では、縄つきになれば一生立ち直ることはできぬ。しかし、お前なら大丈夫だ。御公儀に捕まるもよし、逃げるもよし、とにかく寺を出て俗界で修行してきたらどうじゃ」

「逃げるもよし、捕まるもよし……ですか。門主さま、そのどちらをえらんだら、よろしいのでしょうか」

猊下の真意がわかった五雲坊は、今は明るい表情でたずねた。

「そうよなあ。わしならば牢へなんぞはいるよりも逃げまくるがな」

「逃げまくりますか」

師弟はそこで、声をたてて笑い合った。

一代の剣客僧の五雲は、こうして知恩院をあとにして、永い旅へ出なければならなかったのである。

五

機織はたオリの町、西陣の一角に特殊なものを織っている業者が立ちならんでいる。通称法衣機はっぴきと呼ばれ、僧侶の着用する袈裟けさころもを製造している。知恩院をあとにした五雲坊は、この法衣機の一軒、かねて懇意にしていた「中西」に身を寄せたのである。

上得意先の有力者なので、何か大仕事が舞いこんだものと勘違いした「中西」では、下へもおかぬもてなしぶりだった。三度三度の食事に、五雲坊の好きな酒を添えて出した。

三日五日とすぎていったが、五雲坊の口からはいっこうに仕事の話が出てこない。

「五雲さま」

ある晩、主人の利兵衛は酒の相手をしながらきりだした。
「なんだ」

「知恩院さまからどんなお仕事がいただけるのでしょうか」

「仕事？ そんなものはない」

「しかし、あなたさまが手前どもにお泊まりになっておられるからには七条の三十人分とか……」

「利兵衛。わしはな、もう知恩院とは縁の切れた坊主よ。

いや、坊主ですらなくなったなあ」

「ふえー、そ、それはいいたい、どういうお話で」

「女にしくじってな、僧籍を剽奪べんたくされたのだ」

「お酒が好きだとは、かねてうかがっておりましたが、そのうえ女色までも」

「うむ、因果な男だ。やっと十五歳になったばかりの生娘に手を出してな、訴えられて寺社奉行から手配中の身だ」

米ビツがころげこんできたと思っていたのに、とんだ悪僧をかかえこんだと利兵衛は、がっかりしてしまった。

「それではこんなに……」

つい本音がこぼれ出そうになる。

「こんなに酒を飲ませるんではなかった、か」